形式名詞の「とき」に導かれる連体修飾節の意味
—テンスとアスペクトによる変化をめぐって—

洪　　競　春

1．はじめに

古語において，ツ，ヌ，タリ，リの4つの助動詞は，それぞれ，完了，存続，確述，状態の発生というふうに使い分けられており，その意味の区別は顕然たるものであると言えよう。しかし，現代日本語の中では，それらを一括して「タ」で表わしているがために，ひとくくりに「過去」或は「完了」と言っても，その助動詞の担う意味は一様でなく，文中における変化も様々である。したがって，テンスとかアスペクトとかいった文法範疇を，形式名詞の「とき」に導かれる連体修飾節に据えて，基本形と過去形の対立を考察するとき，その動詞の「継続」「始動」「終了」などといった諸相（態）についても，当然，考えられなければならない。

ところで，本稿で問題にしようとする連体修飾節のテンスとアスペクトによる意味の変化，特に，連体修飾節に対して，融通無礙であるかのように見える「とき」（形式名詞）の使い分けについて検討する前に，まず，テンス説とアスペクト説の寄って来たるところや，その概念にふれておく必要がありはしないか。

2．テンスとアスペクトについて

谷崎潤一郎は『文章読本』の中で，「日本語にはテンスの規則などはない。」と述べておられるが，確かに，従来の日本語の研究者の中にも，日本語の基本形と過去形の対立はテンスではないと主張する学者があり，[注1]現在でもその考え方はかなり有力である。それは恐らく次のような例に基づいたものであろう。

○　借りたものは還さなければならない。（松下大三郎『標準日本口語法』中文館書店　1930）

つまり，日本語の基本形と過去形の使い分けは，時とは何の関係もなく，ある事象が完了したか否かという，一般的な文法用語で言えばアスペクトの形式である，ということにほかならない。このアスペクト説は松下大三郎氏に始まると言ってよいかと思うが，最近でも，国広哲弥氏によって大いに提倡されている。

○　隣に坐わっている若い男が貧乏ゆすりをはじめた。

（山口瞳『酔いどれ紀行』より）

ここでいう基本形と過去形の対立も，すべての述語，すべての構文的位置を通じて，「未完了」「完了」というアスペクト的対立であるとし，「表面的に感取されるテンス的意味は語用論の基本原則によって生み出される」[注2]と考えるのである。もう1つは，テンスを「絶対テンス」と「相対テンス」とに分けるべきだとか，「以前」対「非以前」[注3]と観るべきだとかいうような考え方であるが，やはり，本質的にはテンス説のことであろう。このような，従来のテンスとアスペクトの説を一応かいつまんでまとめておくと，概ね，以下の如くなる。

テンスとは，言表事態として描かれている出来事や，事柄の成立時と基準時との時間的先後関係を表わし分けるための述語の形態変化（基本形と過去形）に関する文法カテゴリーである。それに対して，アスペクトは，動詞の表わす動きを丸ごととらえるのか，動きの中に分けて入って過程を広げて持続状態としてとらえるのか，展開局面のどの部分をとらえるのか，といった，動詞の表わす動きの全過程のどの局面に焦点を当ててその動きをとらえ，表現するかを表わし分けるための，動詞の形態変化に関わる語彙・文法カテゴリーである。更に言うならば，アスペクトがその生起を述語の語彙のタイプ（動詞に限られるのが普通であるが，それも主に動きを表わす動詞）に規制されるのに対して，テンスは，述語のタイプを選ばず，その生起を主節の述語として使われるのか，従属節の高い節の述語として使われるのか，といった構文的位置に規制される，ということになる。テンスには，絶対テンスと相対テンスがあるが，絶対テンスとは，発語時と出来事，事柄の成立時との先後関係を表わしたものである。それに対して，相対テンスとは，主節で述べられた出来事，事柄の成立時を基準時として，それと従属節との時間的先後関係を表わしたものである，ということが言えそうである。

では，以上のような概念に即しながら，まず，実例に密着して文末に現われる基本形と過去形の対立において，どう表わし分けられるかを考えることにする。

3．文末に見られるテンスとアスペクト

(1)A　彼女は　いま北京にいる。

　B　彼女は　その頃　北京にいた。

(2)A　今日は　とても　あつい。

　B　今日は　とても　あつかった。

という，ごく日常的な例から，一般に次のようなことが言えよう。つまり，「基本形は現在を表わし，過去形は過去を表わす」といったような一般則にあてはまるのである。が，しかし，次のような場合はどうなるのであろうか。

(3)A　いま，テレビで　ワールドサッカーを見る。

　B　さきほど，テレビで　ワールドサッカーを見た。

例文(3)Bは，過去を表わすものと観てもよいが，(3)Aは，現在の事態を表わさず，どちらかというと，未来のことにしか解釈されないこと，現在の，進行中の事態を言おうと思えば，必ず，

(4)　「いま，テレビで，ワールドサッカーを見ている。」

というふうに表現しなければならないので，「基本形→現在」「過去形→過去」という一般則では説明できない，ということに気がつくのである。(3)の，「見る」という動的動詞の場合，「基本形・過去形」のことを，むしろ，アスペクト的対立であると観たほうが，ある意味では，説明しやすいかも知れない。ところが，おもしろいことに，同じ動的動詞でも基本形が現在の事態，若しくは，「進行の過程」を表わしうることがうかがわれる。（この事実は，あとで述べる連体修飾節の意味の変化を検討するとき，参考になると思う。）

(5)A　どこへ行くの？　B　家に帰るよ。

これは，Aが町で，偶然，Bに会ったときの会話である。言うまでもなく，Aの「行く」も，Bの「帰る」も，あきらかに，現在の事態或は進行の過程（筆者は仮にそう名づけておく）を強く意識した表現であって，未来のことを表わすものであるとは，決して言い難い。しかし，それが，ある会社での会話であるならば，たとえば，「今晩，どうする？」に対する答えとして，「家に帰るよ」は，未来のことを表わすものであると，日本人なら誰でも直感するのではないかと思われる。更に，

(6)A　今日，うちの店は　休みです。B　昨日，うちの店は　休みでした。

(7)A　ぼくは　いま，とても忙しい。B　ぼくは　昨日　とても忙しかった。

(8)　くれぐれも　よろしくお願いします。

(9)　この問題について，あなたは　どう　考えますか。

(10)　おかしいな，ガスもれのにおいがする。

(11)　ぼくは　どういうわけか　胸がどきどきする。

というような場合，(6)(7)が名詞＋ダ（の類），形容詞（の類）で，「基本形・過去形」が，テンス的対立であるのに対して，(8)(9)は，現在における話し手の態度，主張，判断などの意志表明に用いられるものであって，未来において，こうした動作をおこなうことは問題になっていない。したがって，こうした用法のときの意味を未来と観ることは，極めて難しいようである。また，(10)(11)も同じように，現在における話し手の感覚や，気分を表わすもので，その動作は未来のことには成り難いのである。

このように考えてくると，「基本形・過去形」が，テンス的対立であるか，アスペクト的対立であるか否かを判断するとき，まず，走ル，食ベル，飲ム，歩ク，書クなどの，動作を表わす動詞や，雨ガ降ル，空ガ晴レル，川ガ流レル，花ガ咲クなどの，自然現象を表わす動詞や，椅子ニ坐ワル，電気ガ消エル，東京ニ到着スル，会議ガ終ワルなどの瞬間動詞というふうに分類し，それらが，どのような種類の述語をなし，どのように働くかという条件づけをする必要がある，ということが察せられる。

以上のようなことを念頭におきながら，今度は，本稿の主たる関心である述語の基本形・過去形の連体修飾節における使い分けが，形式化した名詞（形式名詞）の「とき」に対する修飾語或

は修飾節において，どのようになるかという点に限って考察してみたい。（修飾節の動詞のみを考察の対象とする。）

4.「とき」に対する修飾節のテンスとアスペクトによる意味の変化

まず，被修飾語が名詞である場合，たとえば，次の(1)イロのように，両方とも可能であり，しかも，両者は，明瞭に異なる内容を表わしている。

(1)イ　予防注射をする人は　後に残った。

　ロ　予防注射をした人は　後に残った。

(1)イの下線部の「現在形」は，主節の動詞の表わしている時点（過去）において，「する」という動作が，未だ完了していないことを，「過去形」は，それが完了していたことをそれぞれ表わしており，その違いが顕在化する。これは，いわゆる相対的テンスというもので，実質的には，テンス的対立でなくして，言わば，アスペクト的対立である。なぜなら，(1)イロに，「昨日」という，時間を表わす言葉をつけてみても，従属節の下線部の意味に何の変化も生じないことからも，未完了，完了の形式であることがわかるからであろう。なお，次のような，(2)ハニ，(3)オへの場合は，

(2)ハ　チャイナドレスを着た中国人の女性が入ってきた。

　ニ　チャイナドレスを着ている中国人の女性が入ってきた。

(3)オ　その人がかけためがねには見おぼえがあった。

　へ　その人がかけているめがねには見おぼえがあった。

のように，その連体修飾節のテンス的側面が，主節のテンスに包まれてしまい，アスペクト的側面だけが現われる，という事実にも注目しなければならない。このように，上例の場合，連体修飾節の動詞に基本形をとるか，過去形をとるかは，いずれも，いままで観てきたテンス，アスペクトの一般則に従うものと考えてよさそうである。

Ⅰ　寝るときにも足を向けぬ。

Ⅱ　借りるときの地蔵顔，返すときの閻魔顔。

これは，日本人なら誰でもよく知っていることわざ[注4]であろう。Ⅰは，恩人などに敬意を表わし，夜寝るときも，その人の住む方角に足を向けて寝ない，片時もその恩を忘れないで感謝するたとえ，Ⅱは，金を借りるときにはにこにこ顔だった人が返すときにはふきげんな渋い顔をすることのたとえであるが，興味を引かれるのは，やはり，このような，形式名詞の「とき」に導かれる連体修飾節の基本形と過去形の対立である。そこで，実例に基づいて，それらがどのように変化したり，中立化したりするのかを一括して観察することにする。

（以下，例文のあたまに付した，×は，その文が非文法的であること，△印は，文法性について疑いがあり，人によって判定がゆれるものであることを示す。）

(4)ア　中国へ来るとき，友達が空港まで来てくれた。

イ　中国へ来たとき，友達が空港まで来てくれた。

これは，主節に対して，「テンスの一致」と「テンスの不一致」がよく見られる代表的な例である。主人公が，たとえば，日本人だとすると，この場合，(4)アの空港は日本，(4)イのそれは中国ということになり，従属節の「基本形」は，主節の動詞の表わしている時点において，「来る」が未完了を，「過去形」の「来た」は完了を表わしている。つまり，従属節の基本形と過去形の対立はアスペクト的対立である，というふうに，従来の一般則にあてはめて定義してもよさそうである。ところで，(4)アイの文意から観て，主人公が日本人であり，また，話し手であると判定し，それを従属節に表わすと，

○　わたしが中国へ来るとき，友達が空港まで来てくれた。

○　わたしが中国へ来たとき，友達が空港まで来てくれた。

というふうな形になり，構文的には，発見の条件や，時間的な状況をあらわす「～と」（接続助詞）の用法に類似していることがわかる。

(5)ウ　×家に帰るとき，家族はもう寝ていて電気も消えていました。

エ　家に帰ったとき，家族はもう寝ていて電気も消えていました。

(6)オ　×昨日，彼女に電話をかけるとき，お話し中だった。（彼女は誰かと話をしていた）

カ　昨日，彼女に電話をかけたとき，お話し中だった。（彼女は誰かと話をしていた）

上例(5)(6)は，構文的に(4)に似通っており，話し手の，主節の出来事に対する「発見」[注5]とも言うべき意味あいを表わすものであるが，(5)(6)の従属節の動詞が基本形では，「家族はもう寝ていて電気も消えていました」「お話し中だった」という「発見」は，まず，従属節の動詞の動作が完了しないかぎり，ありえないのである。換言すれば，(5)ウの「帰るとき」は帰る途中，或はその経路をさしており，(6)オの「電話をかけるとき」はその動作が事実上行なわれていないということに基づいているので，主節の述部の成立時とは時間的なずれが見られる。前者は進行中であり，後者はその動作をしようとする，意志の発現段階に過ぎない。だとすれば，当然，被修飾形式名詞の「とき」に導かれる，従属節の基本形と過去形の対立は，単に，テンスとアスペクトでは説明し難く，その動詞の示す属性，機能，意味ともかかわりあうということが言えそうである。次の(7)(8)(9)は，(5)(6)とは逆に，従属節の動詞を基本形をもって表わす例である。

(7)キ　昨日，家に帰るとき，駅で友達に会いました。

ク　×昨日，家に帰ったとき，駅で友達に会いました。

(8)ケ　去年，東京へ行くとき，新幹線の中で，彼女に会いました。

コ　△去年，東京へ行ったとき，新幹線の中で，彼女に会いました。

(9)サ　昨日，バスに乗るとき，足にけがをした。

シ　昨日，バスに乗ったとき，足にけがをした。

上例(7)(8)(9)は，従属節と主節の動作の完成主が同一人物であるので，(5)(6)とは構文的に異なる。まず，(7)キであるが，「家に帰るとき」は，前章で述べたように，「家に帰る途中」という意味で

あり，文中の駅というのは，帰るための手段，方法として利用する，どこかの駅のことであろう。電車に乗るために，駅に行って，そのところで友達に会ったのだから，駅は「帰る」という動作主に対して，出発点でも，到達点でもなく，正に「家に帰る途中」の場所なのである。それに対して，(7)クの，「家に帰ったとき」では，「駅で友達に会いました」と時間的にも，空間的にもずれが生じるので不自然である。それは，「家に帰ったとき，（自分の部屋に）電気がついているのに気がついた」という継起の意味を表わす文で，充分，説明がつくのである。(8)ケは，言い換えれば，「去年，東京へ行く新幹線（東京行きの新幹線）の中で彼女に会った」という文になり，ごく自然であるが，(8)コの「東京へ行ったとき」では，東京に行き着いたということが想定され，主節の「新幹線の中で」を省いたら，「彼女に会った」場所が，自然に「東京」になることから，その不自然さが直感できるのである。ところが，幅ひろくアンケート調査をしてみたところ，(8)コに対し，「言える」「言えない」というふうに，まっぷたつにわかれているので今のところ，その判定が極めて難しいのである。「言える」という人たちの言いぶんを聞いてみると，去年のことだから，「東京へ行ったとき」と表現すべきだということであった。つまり，「行く／行った」はテンス的対立であるということであろうが，本稿においては，従属節の動詞の基本形と過去形の対立を観るとき，その動詞の種類による使い分けを重視すべきだという観点から従い難いのである。更に，(9)のサシを観ると，両方とも極めて自然であり，何の違和感も感じられない。が，しかし，「バスに乗るとき」が，バス停からバスに近づき，ステップに足をかけるまでの，言わば，経路，過程を示唆するのに対して，「バスに乗ったとき」は，「乗る」という動作の完了であるから，バスの中を表わす，というふうに，意味上，相違が見られる。したがって，(9)サは，バスに乗る過程でけがをしたことになり，(9)シは，バスの中でけがをしたことになる。ということが言えそうである。要するに，前掲例文(6)オのような，「とき」に導かれる従属節の「電話をかける」には，「進行中」という意味はありえず，その動作をする直前，或はそうしようとする意志の発現段階という意味しかないのである。この類の動詞には，「食べる」「飲む」「書く」「見る」などがあって，「進行中」という意味を表わそうとしたら，必ず，「食べている」「飲んでいる」「書いている」「見ている」にしなければならない。それが，「行く」「来る」「帰る」のような，移動を表わす動詞(このような動詞を，状態動詞と名づけている学者もいるが)の場合，「行っている」「来ている」「帰っている」は，「進行中」という意味ではなく，明らかに，既に実現，完了した事実を，現在と結びつけていったようなものである，ということは，論を俟たないであろう。だからこそ，「行く」「来る」「帰る」といったような動詞は，「とき」に導かれる従属節において，意味上，基本形をもって「進行中」という機能を担うことができるのだと思うのである。このように観てくると，われわれは，基本形と過去形の対立を観察するとき，その動詞の種類，属性，機能，意味に基づいて，時の点に関わる陳述と事象を，幅のある過程の中において，その過程の始まりか，終わりか，或は，その途中であるかを言い分ける語法とにわける必要がある，ということに気がつくのである。

次の二人の会話に注目したい。

(10)ス　その資料を，わたしもいただけませんでしょうか。

セ ×いいよ，あした，来るとき，あげる。

ソ　いいよ，あした，来たとき，あげる。

(11)タ　あ，テープを持ってくるのを忘れてしまった。

チ　気にしない，気にしない。あした，来るとき，もってきてもかまわない。

ツ △気にしない，気にしない。あした，来たとき，もってきてもかまわない。

いままで観てきたのは，「去年」「昨日」という時間を表わす副詞からもわかるように，いずれも，「過去」の事柄についての例文であった。それが，(10)(11)の場合は，どちらかというと未来の事柄である。(10)ソの，「あした，来たとき」は，（あとで述べる）「あした　来たら～」という仮定条件を表わすものに一致していると観るべきである。ところが，(11)は，甲が乙から，テープを借りたということを前提にし，甲が，そのテープを乙のところに持ってくるのを忘れた，という文である。テープは，甲が持ってくるのを忘れたのだから，確かに（甲の家に）置いておいたままである。それを乙が甲に対して，「あした，来たとき，返してもらいたい」と言うならばわかるような気がするが，しかし，「来たとき，持ってくる」では，矛盾もはなはだしい。「あした，来るとき，スーパーによって買ってきてください」は「あした，来たとき，スーパーによって買ってきてください」というふうに表現してもよさそうだが，すくなくとも，ニュアンスの違いはあろうかと思われる。前者は，「来る過程」に焦点を当てた言い方であり，買い物をする場所は，来る途中のどこでもいいが，後者は，「来たとき」つまり「来たら」に重みがあって，買い物をする場所は，話し手の近くのスーパーである。(11)ツの「来たとき」が成立し難いのは，「もってくる」が「携帯」という意味に起因しており，しかも，その出発点と移動の過程で行なわれるべき動作であるからであろう。このように，従属節の基本形と過去形を観るとき，話し手自身の視点に，使い分けが依存している点にも注意をはらわなければならない。

(12)テ　日本人は，ごはんを食べるとき，「いただきます」と言います。

ト ×日本人は，ごはんを食べたとき，「いただきます」と言います。

(13)ナ　汽車は，トンネルをくぐるとき，汽笛をならします。

ニ △汽車は，トンネルをくぐったとき，汽笛をならします。

(14)ヌ　私は，映画を見るとき，めがねをかけます。

ネ ×私は，映画を見たとき，めがねをかけます。

(15)ノ　電話をかけるとき，10円玉を入れます。

ハ ×電話をかけたとき，10円玉を入れます。

(16)ヒ　夜，寝るとき，歯をみがくことにしています。

フ ×夜，寝たとき，歯をみがくことにしています。

上例(12)～(16)は，いずれも，基本形をもって，「～をする直前」という意味を表わしており，「とき」

を，「～前」におきかえることが可能である。しかし，次の(17)(18)(19)(20)は，同じように，基本形をもって表現できても，必ずしも，「～をする直前」という意味を表わすものであるとは言えない。したがって，「～前」におきかえることが不可能である。

(17)ヘ　バスに乗るとき，足元に気をつけてください。

　ホ　バスに乗ったとき，足元に気をつけてください。

(18)マ　父は，息を引きとるとき，「花子のことを頼む」と言った。

　ミ　×父は，息を引きとったとき，「花子のことを頼む」と言った。

(19)ム　試験を受けるとき，ノートを見てはいけません。

　メ　×試験を受けたとき，ノートを見てはいけません。

(20)モ　おふろにはいるとき，足元に気をつけてください。

　ヤ　△おふろにはいったとき，足元に気をつけてください。

(17)の「バスに乗るとき」，(18)の「息を引きとるとき」，(19)の「試験を受けるとき」は，意味上，それぞれ，バス停からバスのステップまでの経路，肩で息をするような，苦しい場面，テスト・ペーパーに書きこんだり，まちがったところをなおしたり，じっくり考えたりする過程などが想定されるのである。(20)は，人によってその判定がゆれる，代表的な例である。「おふろに入る」を，おゆにつかったり，体をながしたり，シャンプをしたりするといったような，一連の動作を表わすものであると言うべきであろう。しかし，実際，あたってみると，「おふろにはいるとき」は，ふろばの周辺（外側）を，「おふろにはいったとき」は，ふろばの中を想定させるのだという見方が優勢であった。その中には，「おふろにはいって酒を飲む」という表現の場合，おふろにはいったあとで酒を飲む，という意味でなくして，ふろばの中で酒を飲む，という意味にもなるのだと主張する人もいたので，驚かずにはいられなかったのである。それもそのはず，中国で，全国大学統一試験の採点をしたことがあるが，その時，「おふろにはいる」は，一種の慣用語であるから，「進澡堂」（ふろばにはいる）という訳はまちがいであるという判断のもとで，「進澡堂」を×に，「洗澡」（入浴する）を○にしたのが，今でも記憶に新しい。「おふろにはいる」が，一連の動作を連想させるような言葉でありながら，日本人のあいだで，その意味の分析をなさずに，無造作に使われるという事実に対して，それが，「ゆぶねにつかる」という意味がもとであるからだと説明するしかない。上例(12)～(16)は，いずれも，「過去形」では表現できないが，(17)は，「過去形」でも表現できそうである。これはいったい何故なのであろうか。

(21)　バスに乗ったら，たばこの火を消してください。

　　バスに乗ったとき，たばこの火を消してください。

(22)　△おふろにはいったら，足元に気をつけてください。

　　△おふろにはいったとき，足元に気をつけてください。

(23)　家に帰ったら，おふろに入ってください。

　　家に帰ったとき，おふろに入ってください。

(24)　彼に会ったら，よろしく伝えてください。
　　彼に会ったとき，よろしく伝えてください。
(25) ×本を読んだら，めがねをかけてください。
　　×本を読んだとき，めがねをかけてください。
(26) ×ごはんを食べたら，「いただきます」と言ってください。
　　×ごはんを食べたとき，「いただきます」と言ってください。
(27) ×電話をかけたら，10円玉を入れてください。
　　×電話をかけたとき，10円玉を入れてください。
(28) ×夜，会社で寝たら，歯をみがいてください。
　　×夜，会社で寝たとき，歯をみがいてください。
(29) ×父は，息を引きとったら，「花子のことを頼む」と言った。
　　×父は，息を引きとったとき，「花子のことを頼む」と言った。
(30) △汽車はトンネルをくぐったら，汽笛をならす。
　　汽車はトンネルをくぐったとき，笛をならす。

上例(21)から(24)までは，確かに，従属節の動詞を「～たら」でも，「～たとき」でも表現できるが両方とも主節の動作が，従属節の動作の完了を前提条件とするもので，それも，同一主体の継起的な動作を表わす命令文である。したがって，「バスに乗って，たばこの火を消してください」「おふろに入って，足元に気をつけてください」(「おふろにはいる」が，「ふろばにはいる」という意味として成立するならば)「家に帰って，おふろに入ってください」「彼に会って，よろしく伝えてください」というふうに，継起の意味を示す「～て」(接続助詞)と対応するのである。ここで言う「～たら」は，その前の動作の完了が確実であることを前提にするもので，決して，「酒を飲んだら，顔が赤くなる」「風がふいたら，波が立つ」の「～たら」とは同類ではない。これは，(30)からも充分説明できるのであろう。(30)の，「トンネルをくぐったら」「トンネルをくぐったとき」は，主節の「汽笛をならす」に対して，若し，そういうことがあったとしたら，という意味を表わし，継起関係にあるとは言えないのである。「汽車がトンネルをくぐると汽笛をならした」の「トンネルをくぐると」は，「汽笛をならした」とは継起関係にあり，ごく自然であるから，「汽車はトンネルをくぐったとき，汽笛をならした」も同様に成立するのである。ところが，(25)(26)(27)(28)(29)は，主節の動作が，従属節の動作の完了を条件にしない，というよりもむしろ，完了では成立し難いものであるから，「～たら」「過去形＋とき」という形で表わすと不自然になるということがうかがわれる。これは，継起の意味を表わす「～て」と対応しないということによっても確かめられるのである。このような場合の，従属節の動詞は，畢竟，「食べる」「読む」「かける」「くぐる」といったような，持続性をもつ動作性動詞や，「寝る」「引きとる」といったような瞬間動詞であるが，従属節において，未完了，完了の意味が強くにじみでるものであると言ってよい。動作性動詞は，一般に，

(31)　日本人は，ごはんを食べたとき，「ごちそうさまでした」と言います。

のように，文の前後関係によって，従属節の中で完了の意味を表わすことができるし，次の(32)～(36)のように，完了，未完了とは関係なく，漠然とした「その時」を表わすこともできるようである。この場合，「継起」の意味は消えてしまう。

(32)イ　△昨日，中華料理屋で，ごはんを食べるとき，食事券を使いました。

　ユ　昨日，中華料理屋で，ごはんを食べたとき，食事券を使いました。

(33)エ　△昨日，中日劇場で，映画を見るとき，めがねをかけました。

　ヨ　昨日，中日劇場で，映画を見たとき，めがねをかけました。

(34)ラ　△昨日，三越百貨店の中で，電話をかけるとき，100円玉を入れてしまった。

　昨日，三越百貨店の中で，電話をかけたとき，100円玉を入れてしまった。

(35)リ　△昨日，喫茶店で，コーヒーを飲むとき，友達に会いました。

　昨日，喫茶店で，コーヒーを飲んだとき，友達に会いました。

(36)ル　△昨日，区役所で，書類をかくとき，名前をまちがえてしまいました。

　昨日，区役所で，書類をかいたとき，名前をまちがえてしまいました。

しかし，それが未来を表わすものの場合は，逆に，「基本形＋とき」のほうが自然である。

(37)　あした，図書館で，本を読むとき，この座布団を使ってください。

　△あした，図書館で，本を読んだとき，この座布団を使ってください。

(38)　あした，区役所で，書類を書くとき，このボールペンを使ってください。

　△あした，区役所で，書類を書いたとき，このボールペンを使ってください。

(39)　あした，ギョウザを作るとき，にんにくを入れないでください。

　△あした，ギョウザを作ったとき，にんにくを入れないでください。

(40)　あした，酒を飲むとき，この薬を飲んでください。

　あした，酒を飲んだとき，この薬を飲んでください。

上例(37)(38)(39)の従属節の動詞は，基本形でなければならない。しかし，(40)は，両方とも言えそうであるが，それにしても，「あした，酒をたくさん飲んだとき」というふうに表現すべきであろう。つまり，この場合，「あした，酒をたくさん飲んだとき」は，状態的で，意味上，「あした，酒をたくさん飲んだら」に一致しており，前掲例文(21)に類似している。

これとは対照的に，前述した「乗る」「はいる」「帰る」「行く」「来る」といったような，移動を表わす動詞は，時を表わす「昨日」「あした」という副詞とは関係なく，一般に，基本形，過去形が未完了，完了の意味を担うものである。

(41)レ　昨日，バスに乗るとき，財布を盗まれた。

　ロ　昨日，バスに乗ったとき，財布を盗まれた。

(42)ワ　さきほど，部屋にはいるとき，足にけがをした。

　イ　さきほど，部屋にはいったとき，足にけがをした。

(43)ウ　昨日，彼女は家に帰るとき，おふろにはいったそうだ。

エ　昨日，彼女は家に帰ったとき，おふろにはいったそうだ。

(44)オ　家内は，去年，北京へ行くとき，カメラを買ったのです。

ン　家内は，去年，北京へ行ったとき，カメラを買ったのです。

上例(41)の「財布を盗まれた」場所は，文意から観て，二ケ所ということになりはしないか。つまり，「バスに乗る」経路とバスの中というふうになるのである。(42)も同様，「けがをした」場所が，確かに，部屋の外（ドアの周辺）と部屋の中が想定される。(43)の彼女の「おふろに入った」場所も，出発点になる友達の家か，大学の寮かどっちかでもいいし，もう一つは，彼女自身の家ということになる。更に，(44)の場合も，主人公が日本人であるとすると，「カメラを買った」場所を，日本，北京というふうに解釈するのが自然であろう。ところで，(41)(42)(の)「バスに乗るとき」「部屋にはいるとき」が，経路，過程をさしているのに対して，(43)(44)の「家に帰るとき」「北京へ行くとき」は，その動作をする前の，あるときをさしている，ということに気がつくのであるが，次の(45)(46)からも移動を表わす動詞が「とき」に導かれて，経路，過程を意味するだけでなく，場合によっては，その動作をする直前という意味を表わしうることが確められるのである。

(45)　家に帰るとき，ちゃんと電気を消してください。

(46)　家に帰るとき，スーパーによって買い物をした。

次には，いままで述べてきたことをふまえながら，従属節の中の動詞が過去形のみである場合を検討してみたい。

(47) ×日本語を勉強する目的を聞かれるとき，何と答えますか。

日本語を勉強する目的を聞かれたとき，何と答えますか。

(48) ×あなたは，男たちにからかわれるとき，怒ったりしますか。

あなたは，男たちにからかわれたとき，怒ったりしますか。

(49) ×彼が外国人だと知るとき，びっくりするでしょう。

彼が外国人だと知ったとき，びっくりするでしょう。

(50) ×新しい薬ができるとき，全国の病院に発送されるだろう。

新しい薬ができたとき，全国の病院に発送されるだろう。

(51) ×となりで，火事がおこるとき，あなたはどうしますか。

となりで，火事がおこったとき，あなたはどうしますか。

(52) ×宝くじがあたるとき，きっと，うれしいでしょう。

宝くじがあたったとき，きっと，うれしいでしょう。

(53) ×先生に叱られるとき，きっと，泣くだろう。

先生に叱られたとき，きっと，泣くだろう。

(54) ×全員集まるとき，この資料をくばってください。

全員集まったとき，この資料をくばってください。

上例(47)～(54)は，その従属節の動詞を基本形では表わしえないのである。(50)(51)(52)(54)の「できる」「おこる」「あたる」「集まる」は，それぞれ，「でかす」「おこす」「あてる」「集める」といったような他動詞を持っており，いずれも，出来事の発生を表わすものであるが，(47)(48)(53)のそれは受身の形になっている。また，(49)の「知る」は，心理状態を表わす動詞であるが，これらの動詞は，いつも，「過去形＋とき」という形で，つぎの動きがおこる時間的な状況，きっかけを表わすものであり，従属節の動詞を，「目的を聞かれたら」「男たちにからかわれたら」「外国人だと知ったら」「薬ができたら」「火事がおこったら」「宝くじがあたったら」「先生に叱られたら」「全員集まったら」というふうに置き換えてみても，まったく意味の変化が見られないということから，「～たら」と対応することがわかるのである。そこで，過去を表わす副詞をつけてみると，

(55) ×昨日，日本語を勉強する目的を聞かれるとき，何と答えましたか。
　　昨日，日本語を勉強する目的を聞かれたとき，何と答えましたか。

(56) ×あなたは，昨日，男たちにからかわれるとき，怒ったりしましたか。
　　あなたは，昨日，男たちにからかわれたとき，怒ったりしましたか。

(57) ×昨日，彼が外国人だと知るとき，びっくりした。
　　昨日，彼が外国人だと知ったとき，びっくりした。

(58) ×三年前，新しい薬ができるとき，全国の病院に発送された。
　　三年前，新しい薬ができたとき，全国の病院に発送された。

(59) ×昨日，となりで火事がおこるとき，ぼくはおふろにはいっていた。
　　昨日，となりで火事がおこったとき，ぼくはおふろにはいっていた。

(60) ×先週，宝くじがあたるとき，本当にうれしかった。
　　先週，宝くじがあたったとき，本当にうれしかった。

(61) ×昨日，先生に叱られるとき，黙っていた。
　　昨日，先生に叱られたとき，黙っていた。

(62) ×おととい，全員集まるとき，この資料をくばったのです。
　　おととい，全員集まったとき，この資料をくばったのです。

というように，「昨日」「三年前」「先週」「おととい」という時間を表わす副詞に左右されることなく，従属節の動詞には何の変化も生じないことが察せられる。

(63)　彼女を追悼するとき，われわれは，断腸の念を禁じえません。
　　×彼女を追悼したとき，われわれは，断腸の念を禁じえません。

(64)　訓読語を検討するとき，われわれは，漢文法と結びつけて考えなければならない。
　　×訓読語を検討したとき，われわれは，漢文法と結びつけて考えなければならない。

(65)　女性は，恋するとき，一番きれいに見える。
　　×女性は，恋したとき，一番きれいに見える。

(66)　人が悲しむとき，よろこんだり，歌を歌ったりするのは失礼だ。

×人が悲しんだとき，よろこんだり，歌を歌ったりするのは失礼だ。

(67)　皆がいらいらするとき，ぼくだけがおちついているのもおかしいような気がする。

×皆がいらいらしたとき，ぼくだけがおちついているのもおかしいような気がする。

上例(63)～(67)の従属節の動詞は，いずれも，能動的な心の動き，積極的な感情の発動を表わすものである。このような捉え方に準ずれば，(63)の「追悼するとき」は「未来」の意味ではなく，追悼文を読みあげる話し手の，その時であり，「断腸の念を禁じえません」は，「追悼するとき」に対して，共起，帰結の関係にあるということが明確に浮びあがるのである。(64)(65)(66)(67)も同様，このような場合，前掲例文(55)～(62)とは逆に，従属節の動詞は基本形でしか表わしえないのである。同じ心の動きを表わす動詞と言っても次の(68)～(72)は，また逆に，基本形をもって表現することが難しいようであるが，それらの相違は，一体，どこに求めればよいのであろうか。

(68) ×これは，興奮するとき，現われる症状である。

これは，興奮したとき，現われる症状である。

(69) ×この薬は，船に酔うとき，飲んでください。

この薬は，船に酔ったとき，飲んでください。

(70) ×困まるとき，助けてくれた人は，忘れてはいけない。

困まったとき，助けてくれた人は，忘れてはいけない。

(71) ×自分が騙されたと思うとき，本当に，くやしかった。

自分が騙されたと思ったとき，本当に，くやしかった。

(72) ×カットナルとき，いくら頼んでもむだだ。

カットナッタとき，いくら頼んでもむだだ。

上例(68)～(72)の，「興奮する」「酔う」「困まる」「思う」「カットナル」といったような動詞は一見して，前掲例文(63)～(67)のそれと同類の動詞であるようだが，実質的には，一時的な気の動きや，感情の直接的表出を示す点で，判然とした相違が認められるのである。この類の動詞は，「知る」「できる」「おこる」「あたる」「集まる」「感染する」「終わる」「決まる」のような，一種の状態の変化を表わす動詞や，「聞かれる」「からかわれる」「叱られる」「ほめられる」といったような受身の動詞と同様に，「とき」に導かれる従属節において，その述語を「過去形」でしか表わしえないものであるとみなすのが妥当であろう。

5．お　わ　り　に

以上，「とき」に対する修飾節のテンスとアスペクトによる意味の変化について，動詞の属性，機能に即して，いろいろな場面に展開しながら検討してみたが，一応，結論を述べると次の如くなる。

Ⅰ　従属節の基本形・過去形の対立を観るとき，動詞の類別と形態に焦点をあてて，その動作の発点，終点，途中の経過，持続の相などに注目しなければならない。

II　従属節と主節が，発見の条件や，時間的な状況を表わす関係にある場合，「過去形＋とき」でなければならない。それに対して，従属節の動詞が，受身の形や，「知る」「おこる」「できる」のような動詞の場合，過去形をとらなければならないが，逆に，「追悼する」「恋する」「いらいらする」のような，能動的な心の動き，感情の発動を表わす動詞の場合，基本形で表わすのが普通である。それも，従属節の動詞が，一時的な感情の直接的表出を示すもの，たとえば，「興奮する」「酔う」「困まる」「思う」のようなものであれば，「過去形＋とき」という形をとらなければならない。

III　従属節の述語が，「食べる」「飲む」「見る」「書く」などの，持続性をもつ動作性動詞の場合，文の前後関係により，未完了，完了の意味を表わすことができるし，過去の事柄を示す文において，「過去形」をもって，漠然とした「その時」を表わすことができる。しかし，「帰る」「行く」「来る」「入る」「乗る」などのような，移動を表わす動詞の場合，それができない。

このように，いままでの観察の結果を３つにまとめてみたが，このことは，「基本形＋とき」「過去形＋とき」の語義究明における一つの傍証として充分参照するに価しよう。しかし，これを更に発展させるためには，より広いくわしい意味分析を加えなければならないと思うのである。専門の立場からの厳しい批判をあおぎたい。

注１　佐川誠義　「日本語のテンスについて」『言語研究』61　1972
　　国広哲弥　「編者補説」『日英語比較講座』第２巻　大修館書店　1980
　　安藤貞雄　「日本語動詞のアスペクト―日英語対照研究」『言語』11巻９号参照　1982
注２　国広哲弥　「テンスとアスペクト―日本語・英語」『講座日本語学』第11巻　明治書院参照　1982
注３　金田一春彦　『日本語動詞のアスペクト』麦書房参照　1976
注４　（『故事・ことわざの辞典』小学館，昭和61）参照
注５　「改札口にはいると，列車はうごきだした」「家に帰ったら，おじさんがきていた」の「～と」「～たら」は，主節のことがらの発見の条件となるのである。「昨日，彼女に電話をかけたとき，お話し中だった」の「かけたとき」が，文意から観て，「～と」「たら」に似通っているので，「発見」という言葉を用いたのである。

参　考　文　献

1）松下大三郎　『標準日本口語法』中文館書店　1930
2）松下大三郎　『改撰標準日本文法』勉誠社　1978
3）時枝誠記　『日本文法・口語編』岩波書店　1950
4）柴谷方良　『日本語の分析』大修館書店　1982
5）金田一春彦　『日本語動詞のアスペクト』麦書房　1976
6）井上和子　『変形文法と日本語（下）』大修館書店　1976
7）佐川誠義　「日本語のテンスについて」『言語研究』61　1972
8）国広哲弥　「編者補説」『日英語比較講座』第２巻　大修館書店　1980
9）国広哲弥　「テンスとアスペクト―日本語・英語」『講座日本語学』第11巻明治書院　1982
10）安藤貞雄　「日本語動詞のアスペクト―日英語対照研究」『言語』11巻９号　1982

11）鈴木重幸　『日本語文法・形態論』むぎ書房　1987
12）北原保雄　『日本語文法の焦点』教育出版　1984